

おはなしの道に我が友を得て

大塚 喜 一

保育修了を前にして子供たちの求めてゐる「おはなしの世界」に没入することにより、お互に別れて後も永遠に心に宿る清新な印象を感得したいと切望してゐた本年二月下旬、神戸の塚田喜太郎兄が近日入浴せらるゝとの事を耳にした小生は、この好機に是非兄のお話から親しく學びたいものゝ早速「お話の交換發表」を申込んだ。そして三月五日午後〇時半、京洛の大自然の恵み豊かなる「ゴドモノイエ」にて兄と相會するを得た。兄の令名は前から存じ上げて居り會等で御目にかゝつた事はあつたが、お話を參觀したのはこれが最初である。この日小生は先づ「お月様いくつ」を話して自己紹介をした。兄はその後を極めて自然になだらかに受けて「四足で匍ふものは何か？」との問答からおはなしを發生させて行つて「お猿さん」の話を子供の遊びの中

に語られた。こゝに始めて小生は兄獨特の「談話」を實地に觀、子供の心の動きが言葉と筋肉運動を通じて刻々に躍如として現はれて行く姿に深き感興を起さざるを得なかつた。それは恰も、今迄小生が「子供と語る」中に子供と話者との兩者俱なる心の動きをしてねらつてゐたところを、その中味に形體を具へさせて眼に見えるやうにして呉れたものであつた。

『談話法』と題せられたる兄の所説は雑誌『幼兒童話』と『いとし兒』とに本年八月頃より連載されつゝあるから是非御讀み下されたく、それによつて學ばるゝ所を日常の保育に實踐せらるゝ中にこの稿に披瀝せむとする微意にも漸次御共鳴下さる事と信ずる。現今の幼稚園のおはなしの一般の情勢に兄の説かるゝ「談話法」が如何に必要にして適切な

る指針を與へらるゝかをさかもかくも先づ知つて頂きたさに、兄の所説の一部を轉載して御紹介すれば

「童話法」は一言にして申せば「お話を如何に完全に、幼児に傳へるか」の問題の研究であります。

處が「談話法」に於ては、「如何に幼兒に完全に語り合ふか」が、その根本目的であるのです。

此處に、その理想、その方法に於て、格段の違ひが生ずるに共に、その幼兒に及ぼす效果に於ては非常な差を生じるものであります。

「如何に聞かすか」これは幼兒童話の目標であります。

「如何にしゃべらすか」これが談話の理想であります。「いしし兒」八月號三七頁より

ミにもかくにも、幼兒教育上、如何におしやべりが大切なものであるかを知つて頂くに、如何にこの大切なおしやべりが母親や保母達により抑壓されてゐるかを知つて頂きたいのです。そして「談話」なるものは、この幼兒のおしやべりの上に立脚して、これを指導し、これ

を訓練する方法である事を知つて頂き度いのであります。「いしし兒」九月號三五頁より

三月中に今一度相會したきものゝ願つてゐたがお互に多忙の爲その機を得ず、年度改つて四月二十三日朝、堀川幼稚園で「桃太郎」のお話を聴く事を得た。其頃小生は拙稿「お話の深さ」(「話方研究」第十三卷第六、七號所載)を近頃経験した話者としての心の動きを反省して書きつゝあつた時であり、殊にその前日二十二日の午後は日彰幼稚園の二ヶ年保育年長兒の求めに應じて自由な形態でお話すること再度その後直ちに時を愛惜してその二度目のお話の特別の印象(後説十月十五日の記録参照)を書きこめたりしてゐた事にて、兄との再會を得る事喜に耐えず、會ふなり「君はお話してゐる時、聴いてゐる子供達がいつもよく見えてゐるか」ミ、話しつゝ爲さるべきお話の統制に就て小生の當時苦心せる點に就き意見を求めた。兄は直ちにこれに答へて「僕はお話の内容は話してゐる中に樂に自然に心に浮び言葉の態度に出て來るので、それをその場その時の子供達の動きに應じて調整統制しつゝ話して行くのである」ミ説明せら

れ互に語り合つてゐる中に子供達が揃つて「桃太郎」のお話が展開される。成程かうした問答を本位として進行して行く「談話」であるから話す者から聴く者へのみの所謂童話に見出し得ざる自他相呼應して進展する刻々のその場その時の動きが、單に心理的にのみならず事實眼に見えて、何人にも明瞭に觀取せらるゝ譯である。

この日の午後小生が當時執筆中の拙稿の特に心を用ひし要所「話者の語るおはなしがこれを聴く子供達の心の動きとなつて感應して行くこと、そのお話が眞實子供の心にひびく様になるまでの話者としての修練（三省等）を讀みつゝ語り合つた事は、お互の苦心を知り正しき方向態度を求めて俱に進み行かむとする新しき前途を豫告する最適の好機であつた。こゝに同じ道の友を得べきよろこばしき希望を見出した小生は、その後兄と相會する機會を出來得る限り見逃がさぬ様更に自發的に作るやうにした。斯くして我等二人が會へばそれが街路車中屋内等何處であらうとすぐに小生の云ひたい事聞きたい事と話を始め次々と質問の矢を向けて目指す方向へぐんぐん話を切り込んで行き、より

根本へ、さお互の思念を深めて行く様にした。このあつかましい態度に兄はいつも快く應答されて小生の求むる所に兄の背景廣い智見と體驗とより醸成さるゝ産果を常に滋味豊かなる收穫として受用し得る様に惠與せられた。それに喜び感謝しつゝ話を進めれば進める程、我等は喜憂を共にし念願を同じうする事が益々明確に切實に感ぜられて來た。

或は京津國道を走る車中より秋晴の風光を眺めつゝ都市の幼稚園兒の健康の寒心に耐えざる點に憂を共にし大自然に接する教育の人間以上の偉力に就き互の見聞を語り合ひ、或は琵琶湖上を行く船の上で舳に碎け散る浪の音のリズムにいつしか同じ心を以て共に耳を傾けつゝ環境からうまれるお話の世界に思を走せ、或は一保姆の苦心談に應答せられしに互の關心を喚起せられて夕暮近き靜かなる川邊を逍遙し會談しつゝ子供の訴へを眞にきゝわけ得る保姆には如何なる特殊幼兒にもその子の實狀に順應して保育の正道の見出さるる境地に歸一する等、所を變へ時を異にして兩人の會話は保育全般に擴充され人情世態の機微に及んで興味いよゝ深く互の感應共鳴は更に新しき話題を産み出して

行く。或は沈黙想する時あり、或は快談高笑する時あり、而して歸する所は平凡の中より非凡の創作さるゝ眞理の道の發見であり、『要するに子供達はよくお話を聽いて呉れるものだなあ』との深き感懐を俱にする事であつた。

以下兄と相會した日とお互に參觀するを得たお話の経過を列記すれば次の如くである。

- | | | | | | | |
|-------|---|--------|---|---------|---|-------|
| 月 | 日 | 話 | 材 | 場 | 所 | 話者 |
| 七月二日 | | 芳夫さん | | 大阪集英幼稚園 | | 塚田兄 |
| 同 | | お月様いくつ | | 愛珠幼稚園 | | 大塚塚田兄 |
| 七月七日 | | 芳夫さん | | 南大江幼稚園 | | 同 |
| 同 | | 同 | | ランバス幼稚園 | | 同 |
| 九月十七日 | | お月様いくつ | | 下福島幼稚園 | | 大塚塚田兄 |
| 同 | | 芳夫さん | | 同 | | 同 |
| 九月三十日 | | お猿さん | | 船場幼稚園 | | 同 |
- (この日の午後、同園保姆さん方と兄を中心に語り合ふ。詳細後記)。
- 十月一日 芳夫さん 堺第三幼稚園 塚田兄

- | | | | | |
|-------|---|-------|-------------|-----|
| 同 | 同 | 桃太郎 | 殿馬場校(一、二年生) | 塚田兄 |
| 同 | 同 | 芳夫さん | 私立堺幼稚園 | 同 |
| 同 | 同 | 同 | 堺第一幼稚園 | 同 |
| 十月八日 | | 水かめ | 須磨早緑幼稚園 | 大塚 |
| 同 | | 象と鼠 | (塚田兄主事) | 塚田兄 |
| 同 | 同 | 豆の兵隊 | 神戸幼稚園 | 大塚 |
| 同 | 同 | 豆太郎 | 同 | 塚田兄 |
| 十月十一日 | | 母の會講話 | 瀬田基督同胞教會 | 塚田兄 |
| 十月十四日 | | 芳夫さん | 京都生祥幼稚園 | 塚田兄 |
- (保育科一、二年生參觀に引率)
- お話の後、實地に就き解説を乞ふ)
- | | | | | |
|-------|--|------|-----------|-----|
| 十月十五日 | | 桃太郎 | 京都豊園幼稚園 | 大塚 |
| 同 | | 水かめ | 同 | 塚田兄 |
| 同 | | 芳夫さん | 楊梅幼稚園 | 塚田兄 |
| 同 | | 同 | 同 | 同 |
| 同 | | 象と鼠 | 神樂丘コドモノイエ | 大塚 |
| 同 | | 水かめ | 同 | 塚田兄 |
- (右の後 同所にて母の會講話)
- 十月十六日 黄金丸 京都YMCA子供會 塚田兄
- (同夜七時より同所にて『塚田兄を圍む會』に集る 同好の友約十名、前日楊梅幼稚園にての驚くべき事實に就き

兩人より報告の後互に語り合ひ、續いて兄の幼稚園のおはなしの経験により發見せられ啓發せられたる所を聽く。

是等のお互の參觀、その前後の話し合ひには、おはなしを中心として保育全般に種々の所感經驗談等が交換されたのであるが、こゝにはその中最も印象深かりし事を述べやう。この事實の語る眞理を讀者の「おはなしの生活」に取入れて頂きたいとの念願こそ小生がこの稿を記すに到りし最大の動機である。

九月三十日午後の會談に於て、塚田兄は次の如くその經驗を發表された。

『お話中子供達が自由に言葉や動作で發表する事が許されその機會が適當にお話の進行に應じて配置(この用語を特に適切ならしむる必要を感じ塚田兄も熟考の上定む)さるゝ様にお互に話を運んで行く場合には、靜かに身體も動かさず一語も發せず聴く様に要求されさういふ習慣になつてゐる時の様な無理な疲れはない。従てその時間が少し位長くなつても幼児の心身の生き生きした常

態は保存擴充こそされ決して損傷せられず、その後他人がすぐお話をしてもよく出来る。人數時間に於て限度を守らねばならぬとされて來た。又さうである幼稚園のお話も、かうした自由な姿態の中に爲さるゝ時は少數長時間の理想的状態が或る程度迄人數が増し時間が延びてもよく存續し得る事を經驗した。

平生たゞ子供を行儀よく大人しく抑へつけてある幼稚園ほゞ、たゞひ少數であつても一度自由に發表させるに忽ち際限なくあばれ出して統制がつかない。反之、平生子供の生活々動に正常な満足はしめてのび々よく育てゝある幼稚園ならば、たゞひ大勢の子供達であつてもよくお話の流れに副ふて動靜宜しきを得る。

これを聽いて小生は、今度は塚田兄の後を受けて話して見よう、そしてそうきいただけではわかりかねる事を自ら體驗したいと思ひそれにより兄の更に深き交りを見出し得る希望を胸に抱きつゝ、その機を待つてゐた。

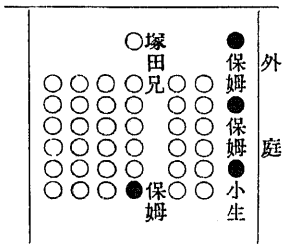
果せる哉、十月十五日小生には思ひ出深き豊園幼稚園にて正しくその好機が恵まれた。

當園には桃太郎の銅像があり約一ヶ月前に除幕式を行はれてゐた事にて、小生は兄の來園を待ちかねて『桃太郎』のお話を所望した。

それを子供達の表情に應答に注意しつつ、側の席で參觀してゐた時にはこんなに活動してゐる後に自分のお話がよく出来るであらうかと思へも案ぜられてゐたが、扱て愈々子供達の前に出て見るにその腫の清澄な生き生きしてゐる事云つたら、丁度子供達が自發的にお話を求めて集つて來てそれに取りかこまれて自由な姿態で話してゐる時(前記四月二十二日午後の實例、最近にはこの日の前々日に經驗したところ)に受くる感じそのまゝであつた。これに力を得て、稍々もすればあせり氣味になりお話の効果や參觀せられてゐる意識にゆるがされようとする自分の肚を据ゑ直して靜かにゆつくりよくお話を味ひつゝ話して行つた。眞剣に聴く子供達に話者の努力の及び難いのを感じたのはこの時であつたが同時にその子供達の特に生き／＼した姿(これが兄の談話のたまものである)に生氣づけられて他の意識の乘ずる隙無く話し得たのも亦この時であつた。話終

つて保姆室に入つた時兄は『あのおはなし、いゝですね。もう子供達が動作に現はさうとする一步前まで來てゐる。あれで動いてもよい事がわかるに……』云はれるので小生は『成程君の後で話させて頂いて甫(は)めてこの間大阪で云はれた事が會得出來た。始に僕が話したのならしてもあんなに行かなかつたらう。この前あれを聽いて頂いた時云ふでせう』。云へば『全く違ふ。それを皆わかつてくれな』のだ。子供達が動けば話しにくいものと思ひ込んでゐるのだからなあ』云、お互に今體驗し合つた事を喜び合ひつゝ、次の楊梅幼稚園へ向つた。

こゝでの兄の『芳夫さん』のお話が半分ばかり進行して、芳夫さんが臺所のあちこちをあけて、こゝにもお饅頭が無い』探してゐる時だつた。突如としてすぐ外の運動場で、『天に代りて不義を討つ……』のレコードが擴声器で鳴り出した。小生はこの時上圖の如



く子供達の最後列に近い横の位置に居たが、この突然の出
來事にどうなる事かその場の情景の變化を一心に參觀し
てゐるミ、小生のすぐ前の子供の一人がこれに合唱しかけ
た、ミ見るや、其間髪を容れず塚田兄は「蓄音器の中にも
ない」ミ蓋を両手で持つて上げる動作をせられた。しかもそ
れが極めてなだらかに反省の意識を交へず反射的自然で、
むしろその子供達の動きに副ふた言葉ミ態度だつた。それ
により注意の外れかけた子供も蓄音器の方はすぐ解消して
お話の中に歸つた。此間實に二十秒か三十秒位だつたらう。
あゝは物理的に必要な最小限度迄聲を少しく大きくせられ
ただけで子供達の聴きぶりも話者の態度も今迄ミ變りはな
い。(あゝできけば、兄には自分の聲がきこえないから、一
番後の子供がよく聞いてゐる程度の聲にしたミ云つてゐら
れた)。レコードはお構ひなしに引續いて鳴つてゐる。今度
は「こゝはお國……」をやり出した。その歌の終る頃、昨日
兄ミ話し合つたときであつたこのお話中最も苦心してる
られる要所に來さうなのでこれで止めばよいがミ思つてゐ
たが、そこへ來る迄に一寸止んだだけで又鳴り出した。さ

ういふ事が二度繰返されたが、子供達が動搖する様があ
しも見えなかつた。大切な苦心の要所を話してゐられる時
もレコードは鳴りづめであつた。物理的には實に大きな音
なのだから、それに心を奪はれない様にお話に心耳を傾注
してゐるミ、この嵐のたゞ中にあつて子供達が皆よくお話
に聴き入つて居り話者聴者一體の眞實景にある事が小生の
心底に銘して深く印象付けられた。そして最初あんなにが
ん／＼ミ耳に響いて堪え難い程に感ぜられたレコードの音
が心理的には次第に遠ざかつて行くの感があつた。この刻
々の進行の情景を心に印してゐた小生は、到底この場を離
れて妨害に注意する様な餘猶は無かつた。正直に云へば多
少それが心にかゝつてゐる時もあり、注意する必要はなく
ミも一體ぎんなに鳴らしてゐるのか參觀事項中の一ミ
して見ておかうとした心のチラミ動かぬもで無かつたが、
事實この場の情景こそミてもそんな外部的なこゝミを注意す
る間のない充實したものであつた。斯くしてレコードはお
話の終る二三分前に止み、お話もやがてめでたく幕が降り
た。この出來事は園長にも大變御心配をかけたらしく、御

〔附記〕

この稿は昭和十二年十月十七日起稿し、二十一日午後こまで書き終り直ちに塚田兄へ速達にて送る。二十三日須磨の早緑幼稚園へ兄を訪ひこの稿の要所を中心に園長姉妹と四人で談論研鑽すること夜半に及び其後小生が再度轉寫清書して遂に今二十八日夕五時半に及びしものである。

しかも二十五日より兄の創案の紙芝居の新しい使命の發見せられしスバラシイ書信を頂くこと毎日、そのよるこぼしきニユースに躍動した小生は今朝神戸へ急行して兄に御都合願つてその實地を拜見、その色彩の明朗構圖の簡素なるは「幼児と語る」二箇所を最も鮮かに見せて頂いた心地がして、洋々たる今後の進境を期待してゐる次第である。(一一、一〇、二八)

これは紙芝居といふよりも「イロエバナシ」と兄の命名せらるゝ如く、その色彩と構圖とによりおはなしが幼児の心に眞にふさはしく感受されて行く効果を助けその情調に和する様に出來てゐる。近日中にフリーベル館より發行さるゝ豫定であるから、その保育上のよさをわかつて活用し善用して頂き度く、それにより先生自身に幼児の心に和して語るおはなしの根本態度の修練さるゝ事と信ずる。尙その御經驗に基く御所感御批判等は今後の製作への助言として承り度く、作者の友人として特に御願致します。(一一、一二、六、校正の際追加)

丁寧な御挨拶を受けて園を辭するや小生は兄に、「あの大きい音の中に於ても子供達が如何によくお話を聴くか、その如實の姿をお蔭でよく參觀させて頂けた。大人の力でさうしてあゝして聴かせ得るものか」と云へば兄は直ちに「そんな事は不可能だ、子供なればこそ聴くのだ」と力強く應答された。それ以上この場合、さすがに何も言へなくてしばらく沈黙の歩みを續けてゐるが、小生はあのレコードが鳴り出した時の間、一髪の際の兄の清明なる態度にこそ、このお話が終りまで兄の望まるゝ如く子供達の求むる如くに達成せらるべき根本が既に樹立されてゐた事に思ひ到り、兄の話者としての眞實の姿にしばし感涙をこめ得なかつた。『子供さへ我等の味方ならば、誰か我等を妨害せんや』とはこの日の參觀によつて會得せしめられた眞理であり、この一まきの忘れ得ざる印象こそは今後小生のお話をその根本の態度に實感に於て内より指導して頂ける事を感じに耐えざる所である。子供と大人との眞に相合する所、それこそは神と人の相合する所ではあるまいか。